

公開講演会「宗教をどう教えるか」

加山 久夫

朝日新聞「こころ」編集長の菅原伸郎氏によるこの講演会は、キリスト教研究所の共同プロジェクト「キリスト教主義教育研究」の今年度活動計画の一つとして企画され、去る5月22日、研究所主催の公開講演会として実施された。

オウム真理教事件は日本で宗教をきちんと教えることの必要性をわれわれに痛感させた。確かに、宗教を「学ぶ」ことは必要であるが、宗教を「教える」ことがいま切実に求められている。ただし、菅原氏の関心は「いかに (how)」教えるかということより、「なに (what)」を教えるかにある。憲法22条や教育基本法には公教育における宗教教育の禁止が規定されているが、そこには宗教教育とは何かについて触れていない。わが国において、1958年に道徳教育がはじまり、宗教と道徳は区別されてきた。そのうえで宗教知識教育はある程度提供されてきたが、たとえば三大世界宗教について教えていないなど、きわめて不十分。では、宗教系の私立学校では宗教をきちんと教えられてきたのであろうか。

氏によれば、これまでの(1)宗派教育、(2)宗教知識教育、(3)宗教的情操教育のほか、(4)対宗教[カルト]安全教育および(5)宗教寛容教育が必要である。

(4)については、今日、統一原理、サイエントロジーなど、カルト的諸集団にみられるように、宗教において危険なものがあることについて安全教育を一人権教育、消費者教育として一提供しなければならない。宗教系の私立学校でそのような努力がもっとなされてよいのではないか。その場合、自校の宗教の正統(当)性について語

らねばならないであろう。しかし、(4)は(5)宗教寛容教育と関わらせておこなうことが必要である。

その意味で、キリスト教主義学校、とりわけ、プロテスタントの学校で用いられている宗教教育の教科書を見ると、他宗教についての言及が乏しい。この点では、カトリックの学校での宗教教育のほうがより広いのではないか。ともすれば、宗教科目は独善的になりやすく、宗教科の先生には同僚から浮き上がった人が多い、という。

では、何を教えるのか。細かいことは大したことではない。学校教育のなかで真に教えるべきことがあるのではないか。宗教知識はいうまでもないが、宗教的情操教育を提供すべきである。公私立をこえて。言葉では伝えにくい、「あるひとつの真理がある」と考える。「天上天下唯我独尊」(釈迦)、「神の国はあなたがたのなかにある」(イエス)といった言葉に見られるような根源的目覚めあるいは根源的出会いがある。たとえば、ガン宣告を受けたとき、日常の細々としたことや出世といったものはつまらないものに思えてくるのではないか。静かな世界をとおして心優しい状態(慈悲、アガペー)、愛敵の思想や実践へと導かれるのではないかと思う。ほんとうの宗教教育はそこにある。

「人間は連続的に成長する。しかし、非連続的に成長することもある。」(ボルノー) 近代の学校教育は人間の挫折や絶望を避けてきたのではないか。人生には別れや死がある。大いなる悲しみから大いなる愛へと人は導かれうる。

現代の若者の宗教的関心はどうか。オカルト的なものや星占いといったものへの関心がある。しかし、より根源的なものへの深まりがもとめられる。生命の根源、すなわち、聖なるものにたいする畏敬の念、生命に対する畏敬の念、そこに真の宗教的情

操がある。

菅原氏は恐らく、他の誰れよりも国内外の多くの学校を訪ね、宗教教育の現場を取材し、宗教と教育の問題を考えてこられたジャーナリストである。学校崩壊、非行の低年齢化などの現代日本の教育的状況において、文部省をはじめ多くの識者はこころの教育や道徳教育の必要性を強調するが、その根底に在るべき宗教の問題がすっぽり抜け落ちているのではないだろうか。菅原氏はこのことにわれわれの注意を喚起して下さった。因みに、氏がこれまで執筆してこられたものなどをまとめて、近く、『宗教をどう教えるか』（朝日新聞社刊）として出版されるとのことである。

（かやま ひさお

所員・一般教育学部教授）

